

身体運動文化学会第 26 回大会

武道の国際化

—国際社会における競技と文化の融合—



期 日：令和 3 年 10 月 9 日（土）～10 月 10 日（日）

主 催：身体運動文化学会

会 場：国際武道大学

身体運動文化学会第 26 回大会

武道の国際化

—国際社会における競技と文化の融合—

目 次

1. 会場案内	3
2. 会長挨拶 原 英喜 (國學院大學)	4
3. 大会実行委員長挨拶.....	5
4. スケジュール	6
5. 基調講演	7
「世界に発信したい日本武道の心」大保木 輝雄	
6. シンポジウム	9
武道の国際化 —国際社会における競技と文化の融合—	
7. 一般研究発表.....	19

【会場案内】

会 場：国際武道大学

住 所：〒299-5295 千葉県勝浦市新官 841



アクセス：

電車でお越しの方

- ・東京駅（JR 京葉線）
→ 蘇我（JR 外房線）
→ 勝浦駅〔約 2 時間 30 分〕
- ・東京駅（特急わかしお号）
→ 勝浦駅
〔約 1 時間 30 分〕
- ・勝浦駅から大学まで徒歩約 15 分

お車でお越しの方

- ・京葉道路 → 館山自動車道（館山道）市原インター下車
→ 国道 297 号線を勝浦方面〔市原インターより約 1 時間〕
- ・東京湾アクアライン → 木更津ジャンクション（茂原方面）
→ 首都圏中央連絡自動車道（圏央道）市原鶴舞インター下車
→ 国道 297 号線を勝浦方面〔市原鶴舞〕インターより約 45 分

【ごあいさつ】



会長 原 英喜（國學院大學）

第26回目となる本学会大会を「武道の国際化—国際社会における競技と文化の融合—」というテーマで、開催することとなりました。昨年に引き続き全面的なオンラインとなったのは、残念なことではありますが、国際武道大学、武道・スポーツ研究科長の田中守先生に大会実行委員長となっただき、基調講演を日本武道学会会長の大保木輝雄先生に「世界に発信したい日本武道の心」と題してお願いすることができました。そして国際武道大学の特色を活かし、井島章先生、丸橋利夫先生に話題を提供していただき、剣道の阿部哲史（国際武道大学）先生にはハンガリーから参加していただき、柔道は増地克之（筑波大学）先生、弓道は松尾牧則（筑波大学）先生、空手は三村由紀（防衛大学校）先生には国内からと、国際化にふさわしいシンポジストをお引き受けいただき心から感謝申し上げます。

2年にも及ぼうとする新型コロナウイルス感染症の影響は、当初の想像を超えた長期にわたり、学会員の皆様の日常生活や研究、教育の場に、そして学校や社会的な指導の場に及んでいることと思います。IT関連の有効性が増して、急速に改善されてきた部分もあろうかとは思いますが、感染症に屈することなく、このように毎年大会を開催し、少しでも研究を進めることに本学会として果たすべき役割があるのではと信じております。多くの会員の皆様の参加を期待しております。

本学会の主旨にご賛同いただき、賛助金などご協力いただいた会社、個人の皆様にこの場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。末筆ながら、この感染症に罹患された方々の少しでも早い回復と、犠牲になられた方々のご冥福をお祈りし、100年に一度と言われるような豪雨の被害に遭われた方々の一日も早い日常への復帰を祈念したいと思います。

本年初頭、身体運動文化学会第 26 回大会を国際武道大学で開催する旨のお話を頂戴いたしました。その折には、秋には新型コロナウイルス感染症も収束に向かい、大会にご参加いただく会員諸兄と勝浦の海の幸山の幸を味わい地酒を酌み交わしながら大いに語らう時間を設けようなどと思いついておりました。また、武道大学ならではの企画も検討せねばと考えもいたしました。しかしながら、次々に変異型のウイルスが確認され繰り返し緊急事態宣言が発出されております。武道・スポーツの大会や各種イベントも中止や延期となる中、本大会も残念ながら全面オンラインでの開催となりました。

対面での発表や質疑応答でこそ踏み込める議論もあるかとは思いますが、一方でオンラインならではの利便性もあります。基調講演・シンポジウム・研究発表それぞれについて有意義な意見交換がなされることを期待しております。

さて、つい先ごろ閉会いたしました 2020 年東京オリンピック・パラリンピックでは、コロナ禍における開催の是非だけでなく、準備段階における様々な問題点を取り沙汰されました。国・東京都・組織委員会・IOC・JOC……そこでなされた判断や対応に納得し難いものを感じたことも少なからずあったように思います。国をあげての一大イベントに政治的な判断が重要となるのはやむを得ないところですが、スポーツ界そのものの声あまり聞こえてこなかったことは残念に思いました。アスリートや指導者そしてスポーツ界全体が声を大にして訴え求めること、またそうする機会や仕組みがいかに不足しているのかをあらためて考えさせられるところです。

今大会のテーマ「武道の国際化—国際社会における競技と文化の融合—」にあわせ、現代社会が武道・スポーツに何を求め期待するのか、武道・スポーツが世界の人々に何を発信すべきなのか、コロナ禍にある今だからこそじっくりと考えてみたいと思います。

【スケジュール】

10月9日（土）

- 11：30～ 常任理事会・理事会
※Zoomにてリアルタイム参加可能
- 12：00～ 受付
- 13：00～ 開会・会長挨拶
原 英喜先生（身体運動文化学会会長）
- 13：05～ 国際武道大学学長挨拶
高見 令英先生（事前録画）
- 13：10～14：10 基調講演 「世界に発信したい日本武道の心」
大保木 輝雄先生（日本武道学会会長、埼玉大学名誉教授）
※講演は事前録画、Zoomによる質疑応答
- 14：20～17：20 シンポジウム（Zoomによるリアルタイム）
司 会：大石 純子（筑波大学）・岩切公治（国際武道大学）
発 表 者：増地 克之（筑波大学）
阿部 哲史（国際武道大学/ハンガリー）
松尾 牧則（筑波大学）
三村 由紀（防衛大学校）
話題提供者：井島 章（国際武道大学）
丸橋 利夫（国際武道大学）

10月10日（日）

09：00～ 一般研究発表（発表15分質疑応答5分）

座長	発表者	タイトル
大野 達哉	川井 良介	運動中のマスク着用が運動実施者の身体に及ぼす影響 ：剣道における切り返し動作に着目して
	周藤 和樹	大学剣道選手における打突動作反応時間と下肢の伸張-短縮サイクル能力との関係
	上宇都 鉄舟	ナノフィール（空気清浄機）使用時の効果について —剣道における更衣室空間の事例から—
軽米 克尊	堀川 峻	明治期の「武道」概念に関する一考察 —武士道としての語義に着目して—
	大石 純子	巖本善治の「武道の辨」に関する一考察
大石 純子	酒井 利信	日欧対話による国際的「生涯武道論」の構築について
	前林 清和	災害と祭に関する研究—魂・心性・身体性の視点から—
林 洋輔	上谷 聡子	コロナ禍における東京オリンピック期間中の行動に関する一考察
	南方 隆太	小学生軟式野球競技人口の動態

12：35～ 総会（優秀論文賞ならびに若手研究者奨励賞表彰式）

【基調講演】



おおぼき てるお
大保木 輝雄 先生

- 出身 岐阜県高山市
年齢 72歳（1949年生まれ）
現住所 埼玉県北本市
略歴 東京教育大学大学院体育学研究科修士課程武道論専修 修了
埼玉大学教育学部教授を歴任
現在 埼玉大学名誉教授
日本武道学会会長
全日本剣道連盟社会体育指導者講習会講師
全国教育系大学剣道連盟顧問、
剣道教士七段、埼玉大学剣道部師範
著書 剣道の学習指導（不昧堂）、ゼミナール現代剣道（窓社）、教育剣道の科学（大修館書店）、これならできる剣道五輪書（スキージャーナル）、剣道の歴史、剣道指導教本、剣道社会体育教本（全日本剣道連盟）、埼玉県剣道三十年史、同五十年史（埼玉県剣道連盟）、日本武道の武術性とは何か（青弓社）などの編集と執筆。
単著として、スポーツ・体育ものがたり（9）きそうスポーツ（岩崎書店）、武の素描（日本武道館）、その他、武道論関係の論考多数。

世界に発信したい日本武道の心

日本武道学会会長

大保木 輝雄

現在、武道という言葉は様々な武道種目の総称として使われている。

2006（平成 18）年に改訂された新教育基本法には、「伝統」の継承が教育目標の一つとして謳われ、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」と明記された。新教育基本法に則った新学習指導要領は 6 年後に施行。さらに改訂を重ね、2017 年に告示された新学習指導要領の中学校保健体育での武道は、「柔道、剣道、相撲、空手道、なぎなた、弓道、合気道、少林寺拳法、銃剣道などを通して、わが国固有の伝統と文化により一層触れることができるようにすること。」として 9 種目を取り上げられた。それらの種目を見据え、「武道の特性や成り立ち」、「伝統的な考え方」などの理解を深めることが求められている。

一方、1964 年に開催された第 18 回東京オリンピック競技大会では柔道が格闘技の正式種目として採用され、東京オリンピック 2020 では空手が加えられたことは周知のことである。その間、各種武道種目は世界的な広がりを見せ、世界の武道人口は今なお上昇中であり、海外の武道人の多くが日本文化への関心と理解を求めているという報告もある。また、大相撲においては海外の力士の勢いもあり、強い人気横綱の登場に様々な論評が飛び交うようになっている。「ワレイマダモッケイニオヨバズ」とは、かの双葉山が 69 連勝を遂げ 70 勝目に敗れた折の師匠への打電文である。荘子達成篇に語られた「木鶏（もっけい）」の寓話は勝負に臨む者の理想的な心へと向かうその変容を段階的に示したもので、人間的な心の成長と豊かさをも育む物語として多くの人に読まれていた。双葉山の逸話は相撲に人間の理想的な姿を求めて精進する心の変容を表したものとして有名である。

先にみた、日本の中学生に日本文化の固有性を「勘や直観、経験に基づく知恵」（暗黙知）を含んだ概念として理解を深めさせるという文科省の要請は、そのまま海外の武道愛好者の関心に応えることにもなる。この喫緊の課題は、1968 年の武道学会設立時に既に課題となっていた「武道とは何か」という古くて新しい問題に区切りをつけることでもある。

武道は、戦国末期から江戸初期にかけて生きた武士達が、命懸けの戦闘で獲得した体験知（身心技法）を次世代に伝えるために、「型」として開花した文化である。そこに示された身心技法はその後を競う競技文化に受け継がれ、「一本」という評価基準を生み出した。

それはやがて国境を越え、職業を超え、老若男女問わず「心と身体の在り方」を示す「一本」を競い合う身体運動文化として今日的な広がりを見せているのである。

ここでは、武道を日本的「対面文化」と捉え、以下二つの視点から読み解いてみたい。

- 一、武道の特性を「向きあう」、「見あう」、「仕あう」身心の在り方が「一本」という表現で示され評価される「あいだの文化」（対の文化）として位置づけ、武道特有の「場」・「間」・「気」という動感感覚を現す言葉をキーワードとして読み直す。
- 一、「礼に始まり礼に終わる」という「礼法」を、「小笠原流礼法の四つの教え」にある正しい姿勢の自覚・筋肉の働きに反しない・物の機能を大切にす・環境や相手に対する自分の位置（間柄や間）を常に考える、という観点で捉え直す。

シンポジウム

武道の国際化

—国際社会における競技と文化の融合—

企画の趣旨

本学会は、1996年の発足以来、スポーツや武道、舞踊、芸能、祭りなどの身体運動を文化として捉えて研究対象とし、様々なジャンル（人文科学、社会科学、自然科学）の研究者が集いつつ学際的なアプローチをすることを目的として活動を続けてきている。今回、武道の伝統文化の価値を尊重し、武道によって有意な人材の育成を行うことを目的に創設された国際武道大学において、第26回大会を開催するにあたり、様々な身体運動文化の中から特に武道に焦点を当てて議論を進めることとする。

柔道につづき空手がオリンピック正式種目となり、多くの武道種目で国際大会が行われるなど、今の武道の世界的な隆盛の要因は一面で競技性にあると考えて間違いはない。しかし一方で、人々は武道のもつ文化的な側面に深みや含蓄を感じ、特に外国人実践者を魅了していることも確かである。競技志向で武道を行っている人、文化性に面白みを感じて実践している人、両者が存在するのかもしれない。しかし、武道の競技性と文化性はそもそも乖離して存在するものではなく、両者が融合してこそ武道の本来の姿であると言えるのではないだろうか。

基調講演においては、武道を専門的に実践しつつ武道文化についての探究を継続的に続けておられる日本武道学会の大保木輝雄会長に、世界に発信すべき武道の特徴についてご講演いただく。

シンポジウムにおいては、武道の競技性と文化性について、各種目により現状（競技的側面と文化的側面）がどうなっているのか、問題点は何か、今後これを一体のものとして発信し世界において展開していくにはどうしたらよいのか、といった事項について広く国際的視座から議論する。このことにより世界に発信すべき日本的身体運動文化である武道の国際社会における立ち位置、および新しい時代における武道の国際化が明らかになるものとする。

司 会：大石 純子（筑波大学）・岩切公治（国際武道大学）

発 表 者：増地 克之（筑波大学）

阿部 哲史（国際武道大学/ハンガリー）

松尾 牧則（筑波大学）

三村 由紀（防衛大学校）

話題提供者：井島 章（国際武道大学）

丸橋 利夫（国際武道大学）

【発表者】



増地 克之（ますち かつゆき）

1970 年生まれ。三重県津市出身。1993 年筑波大学体育専門学群卒業。1996 年筑波大学大学院修了。2012 年～現在筑波大学体育系准教授（スポーツ医学博士）。2016 年～現在（公財）全日本柔道連盟強化委員会女子監督。講道館七段。

柔道の国際化による日本と諸外国の現状

筑波大学体育系准教授

増地 克之

我が国固有の武術に淵源をもつ柔道は、1882（明治 15）年に嘉納治五郎によって道として体系化された。柔道の目的は、「体育」「勝負」「修心」の三つがあり、調和の取れた人間形成の手段として行われ、国内での発展はもとより世界へと発展の道を拓いた。そして柔道の世界的発展の流れを加速する契機となったのは、1964（昭和 39）年にオリンピックの正式競技に採用されたことであろう。現在では 200 を超える国と地域が国際柔道連盟（International Judo Federation）に加盟しており、柔道は世界中に普及・発展していることが窺える。このように柔道が世界に広がった要因は、柔道の起源である柔術の技術から危険な技や技術を取り除き安全にするとともに、柔術稽古衣の改良や修行者に対しては段級を拵えて興味を持たせたことである。さらに、試合を奨励しルールを整備し、相手を敬う目的で礼法を徹底させるなど、柔道の文化的形態が大きく影響を及ぼしている。このように柔道が世界に普及・発展を遂げた一方で、柔道の本質そのものが見失われているのではないかと危惧されているのも事実である。村田は、「柔道を外来文化として受け取る側の世界は、我が国の思想性よりも誰もが取り組める技術性を吸収し、スポーツとして定着させた」と指摘し、柔道が持つ本来の目的である人間形成の道とは別に競技スポーツの道というものが発達しつつあることを示している。すなわち柔道は日本の伝統文化として世界に発信された運動文化であるが、国際化に伴い、柔道の理念に依らず、欧米諸国はそれを理解しやすい形に変容させた上で受け入れ、競技性重視へと転化していると考えられる。そこで世界中に普及・発展した柔道が世界各国でどのように定着しているのか、海外での現状について提示する。さらに毎年数多くの外国人柔道家が様々な目的で来日しているが、柔道の文化性への関心度についてどのように考えているのか、また柔道の国際化における問題点として、柔道のルールの視点から掘り下げていきたい。そして最後に、先般開催された東京オリンピックで初めて採用された男女混合団体戦の試合方法こそ、まさしく国際社会における競技と文化の融合といえるのではないだろうか、団体戦についての日本人と外国人の捉え方の違いに焦点を当て今後の展望についても考えてみたい。



阿部 哲史 (あべ てつし)

1964 年生まれ。国際武道大学卒業。筑波大学大学院修了。1992 年に青年海外協力隊によりハンガリー剣道連盟に派遣。1995 年より国立ベスプレム大学、1998 年よりタンカプヤ仏教単科大学、2018 年より国際武道大学武道学科特任准教授（ハンガリー国立体育大学出向）。ハンガリー剣道連盟テクニカルディレクター、NPO 武道文化フォーラム代表。剣道教士七段。

競技と文化のバランス

国際武道大学武道学科特任准教授（ハンガリー国立体育大学出向）

阿部 哲史

剣道は柔道や空手、合気道と比較すると愛好者数は多くないものの、国際化という視点から議論するために十分な基盤ができあがっている。本シンポジウムでは以下の内容について述べる。

<剣道にみる国際化の現状>

1. 現状としての剣道人口、組織構成、活動内容についての概括。
2. 剣道競技のなかにみられる文化性 ⇒ 経験年数や技量によって異なると考えられ、一般的には剣道発展の歴史的な背景や用具や練習方法、競技形態、剣道特有の所作・慣習などスポーツとの比較がベースになっている。
3. 武道文化への憧憬
 - ① 日本刀を使った格闘技術としての特殊性、あるいは自国の格闘文化への郷愁など。
 - ② 日本文化の伝統性が包摂され、異文化色を享受できること。
 - ③ アジアの哲学や人間教育としての効果に対する期待。
 - ④ 現代スポーツからの開放。

<剣道競技の国際化における問題点>

1. テクニカルな内容
 - ① 現代的な実戦性からの乖離
 - ② 競技者レベルに至るまでの時間の長さ
 - ③ 競技ルールの複雑さ
2. 普及体制の内容
 - ① 一方的な競技ルールや規則の変更
 - ② 日本的な組織運営に対する不信感
 - ③ 競技性の重視への傾倒

<国際社会における競技と文化の融合についての展望>

剣道にかぎらず日本から発信された武道文化に対する諸外国の人々の取り組み方は、21世紀にはいり変質している。簡約に言えば、20世紀は日本からの「武道文化のエッセンス獲得」が時代的な課題であったが、21世紀になって「武道文化の自国化」へとスライドしている。剣道における「競技と文化の融合」についての展望を考える場合、こうした流れを考慮する必要がある。

具体的に剣道界が考えるべきことは以下ではなかろうか。

1. 国際普及の方針の見直し ⇒ これまでも文化性重視が掲げられてきたが、実際に海外で実施したのは競技スポーツとしての剣道普及が主要になっていた事実の認識。
2. 文化性についての情報提供 ⇒ 情報産業の発展によって20世紀と比較して剣道文化に関する情報量が急速に増加している。質の向上が求められる。
3. 文化性重視のアピール ⇒ 国際剣道連盟をはじめ活動内容が競技性の発展を目指すものばかりである現状を改め、「剣道文化の普及・理解」を掲げた国際的なイベントの開催など。



松尾 牧則（まつお まきのり）

1962 年生まれ。山口県柳井市出身。筑波大学体育系准教授。弓道コーチング論担当。弓道
錬士六段。日本武道学会所属。

弓道の海外普及状況について

筑波大学体育系准教授

松尾 牧則

1. 海外における弓道の現状

2006年に、17カ国にて国際弓道連盟（IKYF）が発足した。欧州を中心に普及していた弓道であるが、アジア圏・アメリカ圏を含め、現在は28の国・地域の加盟となっている。

全日本弓道連盟の会員登録数は134,212名（2020年3月末日現在。全日本弓道連盟HP）である。海外の弓道人口は、各国からの報告数によると国際弓道連盟加盟国4,222名、未加盟国646名（2021年7月8日参照集計、国際弓道連盟HP）となっている。各国の実施状況や環境は日本とは大きく異なり、指導体制、弓道具、施設など工夫をしながら実施されている。

・海外における競技的側面と文化的側面

海外での弓道実施者の特性としては、競技よりも文化への関心が高く、実施者年齢も高い。海外へは競技としてよりも日本の伝統的運動文化である武道としての紹介や、禅や精神性と絡めた紹介が多いことと関係が深い。ドイツ人オイゲン・ヘリゲル著の『弓と禅』は、複数の言語に翻訳され、海外弓道家に読まれている。特に欧州においては『弓と禅』により弓道を知った者も多く、精神性への関心が高い。一方、台湾、中国などは伝統的弓射の技法への関心が高い。

・競技の中の文化性

年齢、経験年数等により文化性への関心度には相違があると考えられる。中・高校生、大学生では競技として割り切って取り組む傾向も見受けられる。国際普及における競技の中の文化性を論議する前に、日本でのあり方を再確認しておかなければならないだろう。

・武道文化への思い、憧憬

日本の弓道実施者は、年齢や経験年数が増えるに従って武道文化への関心が高まる。海外の実施者では、競技よりも弓道の武道文化的側面への関心による弓道実施者が多い。海外での弓道実施者には、現代弓道よりも、禅思想と結びついた弓道や、侍の時代の弓道（弓術）へ関心を持つ者も多数見受けられる。日本の武道文化への思いや憧憬は、海外弓道実施者には強いものがあり、理想化されイメージ化されてしまっていることがある。

2. 弓道の国際化における問題点

全日本弓道連盟が推し進める国際化は、日本国内と同様の審査・競技を含めた現代弓道の普及である。そこには海外で求められている文化的側面は少なく、海外弓道実施者の求めるものとのギャップも生じている。審査・競技での普及も必要ではあるが、伝統や文化を含めた様々な弓道への関わり方や、多様な志向、多様性も受け入れる弓道界として普及する必要があるだろう。

3. 国際社会における弓道の競技と文化の融合についての展望

競技としての形態で弓道の国際的普及が行われる場合には、文化との融合という点では限界もあるのではないだろうか。「競技と文化を一体のものとして発信し世界において展開していくにはどうしたらよいか」という問いに対しては、そもそも、日本国内において競技と文化を一体のものとして普及できているのかという疑問が生じる。まずは国内における状況を確認し、常に自己（日本）を振り返っておく必要性を感じる。



三村 由紀 (みむら ゆき)

1988年18歳のとき、第9回世界選手権大会において公認国際大会初優勝（最年少優勝）。その後世界選手権大会は4回優勝、その他各種国内外の大会で成績を残す。2002年より防衛大学校教官となる。2013年より全日本空手道連盟理事。全日本空手道連盟公認六段。

競技としての空手道の中に

防衛大学校講師

三村 由紀

2020東京オリンピックが、1年遅れで開催されました。空手道競技は、開催国で決めることができるオリンピック種目のひとつとして採用されました。今回初めて、競技としての空手道をご覧になられた方々も多いと思います。競技としては全日本学生空手道連盟が1957年（昭和32年）に第1回全日本学生空手道選手権大会を開催し、全日本空手道連盟は1969年（昭和44年）に第1回大会を開催、国民体育大会としては1982年（昭和57年）島根県で行われた第37回より正式種目となっております。

国際大会としては、1970年に世界空手連盟（World Karate Federation, WKF）が設立され、同年に第1回世界選手権大会が日本武道館で開催されています。

海外における現状として、普及の段階は過ぎ、発展の段階にあると考えます。普及の段階では、先人たちが血のにじむような努力、文字通り「命を懸けて」日本の空手を伝えていった経緯があります。その段階では、日本からの指導者が望まれていましたが、最近では世界大会等で日本人選手が勝てなくなり、ヨーロッパや中東の選手の活躍が顕著になったことから、その活躍した選手たちがセカンドキャリアとして他国のコーチとなるのがスタンダードとなりつつあります。その背景には「勝ちたい」という希望があり、日本の先人たちが伝えた「心の在り方」やその他諸々のことは継承されておらず、スポーツとしての空手道が広がったともいえます。とはいえ、180か国を超える国が連盟に登録し、今回のオリンピック種目採用の力も借りて、ものすごい勢いで選手強化が進みました。その結果、今回のオリンピックで行われた8種目の金メダルは、すべて異なる国が獲得しました。さらに、20か国がメダルを獲得したので、どの国にもメダル獲得のチャンスがあったわけです。

競技の中の文化性として、空手道には「形」と「組手」の競技があります。前述したスポーツ化されているのは特に「組手」競技が著しいと感じます。「形」競技は、作法といいますか、相手を仮想したうえでこのように動くというように細部まで決められ、その中でより力強く・正確に、表現することを重視します。したがって、「形」競技の中には文化性が色濃く残っているといえます。女子形で優勝したサンドラ選手が試合後日本のコーチに正座をして礼をした、などとニュースになりましたが、勝ち負けだけではなく「心の在り方」も伝わっていることの表れだと感じています。

シンポジウムでは、より詳細に発表させていただきます。よろしくお願い申し上げます。

【話題提供者】



井島 章 (いじま あきら)

1957 年生まれ。秋田県由利本荘市出身。国際武道大学武道学科教授。同大学剣道部部長。剣道教士八段。日本武道学会所属。剣道に関する著書多数。



丸橋 利夫 (まるばし としお)

1962 年生まれ。秋田県大仙市出身。国際武道大学武道学科教授。同大学剣道部師範。なぎなた部部長。剣道教士八段。日本武道学会、身体運動文化学会所属。

一般研究発表抄録集

スケジュール

期日：10月10日（日）09:00～

座長：大野 達哉

時間	発表者	タイトル
09:00～09:20	川井 良介	運動中のマスク着用が運動実施者の身体に及ぼす影響 ：剣道における繰り返し動作に着目して
09:20～09:40	周藤 和樹	大学剣道選手における打突動作反応時間と下肢の伸張-短縮サイクル能力との関係
09:40～10:00	上宇都 鉄舟	ナノフィール（空気清浄機）使用時の効果について －剣道における更衣室空間の事例から－

座長：軽米 克尊

10:00～10:20	堀川 峻	明治期の「武道」概念に関する一考察 －武士道としての語義に着目して－
10:20～10:40	大石 純子	巖本善治の「武道の辨」に関する一考察

座長：大石 純子

10:50～11:10	酒井 利信	日欧対話による国際的「生涯武道論」の構築について
11:10～11:30	前林 清和	災害と祭に関する研究－魂・心性・身体性の視点から－

座長：林 洋輔

11:30～11:50	上谷 聡子	コロナ禍における東京オリンピック期間中の行動に関する一考察
12:10～12:30	南方 隆太	小学生軟式野球競技人口の動態

運動中のマスク着用が運動実施者の身体に及ぼす影響 ： 剣道における繰り返し動作に着目して

川井良介（日本大学文理学部），神田智浩（中部大学人間力創成総合教育センター）

1. 背景と目的

全日本剣道連盟（以下，全剣連）は剣道の対人稽古の再開に際し，2020年6月4日付で『対人稽古再開に向けた感染拡大予防ガイドライン』を制定した（全日本剣道連盟，2020）。その中で，対人稽古を行う際には面の中でマスク（以下，面マスク）を着用することが必須となり，併せて発声等による飛沫を防止するために面の内側に装着する飛沫防止シールド（以下，シールド）の使用が推奨されている。

これまでに運動中のマスク着用が有酸素運動中のエネルギー消費量に及ぼす影響について検討した研究や運動中のマスク着用が運動パフォーマンスに与える影響について検討した研究が報告されている。Keely et al. (2020) は14人の男女成人を対象に，中程度から高強度のトレッドミルテストとエルゴメーターテストを実施している。その結果，マスクを着用した状態で中程度から高強度の運動を行っても，経皮的動脈血酸素飽和度（以下， SpO_2 ）や組織酸素化指数，心拍数（以下，HR）等に影響を及ぼさなかったと報告している。また，Danny et al. (2020) は運動中に着用するマスクの種類の相違が，短時間高強度運動の運動パフォーマンスに与える影響を検討している。その結果，マスクの着用によって，終末呼気二酸化炭素濃度が軽度上昇したが，有酸素運動中に急性呼吸性アシドーシス（頭痛，錯乱，不安，眠気，昏迷等）の症状を引き起こす可能性は低いと推察している。以上のことから，一般的な身体活動やトレーニング中のマスク着用は，身体の健康や安全に対して大きな影響を及ぼさないことが推測できる。他方，剣道稽古中のマスク着用が運動実施者に与える影響について，浦部（2021）や川井ら（2021）が検討を行っている。川井ら（2021）は剣道鍛錬者を対象とし，マスク着用と非着用時の繰り返し稽古法（以下，繰り返し）前後の SpO_2 等の指標を用いて，マスクの着用が剣道実施者に及ぼす影響を検討している。その結果，運動時にマスクを着用することで，運動直後の SpO_2 が低下する可能性を示唆している。

川井ら（2021）が指標として用いた SpO_2 とは，呼吸や心血管系の能力を検討するための運動負荷検査や運動療法の効果判定等の指標として用いられている（Barbosa, 2020）。また，田平ら（2008）は， SpO_2 が肺での酸素化障害の程度を示す指標になることを報告している。運動中のマスクの着用による影響を検討した先行研究では，高齢者や呼吸器疾患患者を対象に，トレッドミルやエルゴメーター等の一般的な身体活動を模した漸増運動負荷テストから SpO_2 の値を一指標として運動耐容能を比較・検討したものがほとんどであり，剣道のような対人競技を対象に，マスクの着用が実施者の安全性やパフォーマンスに及ぼす影響を検討した研究は少ない現状にある。そこで本研究では，剣道稽古中の面マスク着用が実施者の SpO_2 等の指標にどのような影響を及ぼすかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究対象および実験方法

研究対象は、N大学体育会剣道部に所属する特別な疾患や傷害がない男子学生14名（高校もしくは大学在学時に全国大会への出場経験を有する者）であった。全対象者には事前に本研究の目的、方法、リスクなどを十分に説明し、文書にて同意を得た（未成年の場合には、保護者からの同意も得た）。

測定試技は繰り返し（①正面への面打ち→②体当たり→③左右への面打ち前進4本→④左右への面打ち後退5本→⑤正面への面打ち：打突本数は合計31本で、1回の試技は30秒程度。）とし、先述の①～⑤を1セットとして合計5セット実施した。なお、実験はマスクを着用した試行（以下、マスク試行）とマスクを着用しない試行（以下、コントロール試行）を異なる日に実施し、対象者間でカウンターバランスを取った。

測定項目は、安静時並びに各セット間、実験終了後のSpO₂、安静時から実験終了時までのHR、各セット終了後のRPE、各セットの運動時間、実験前後の血中乳酸濃度とした。

3. 結果

マスク着用時の繰り返し運動直後のSpO₂の測定値（平均値 ± 標準偏差）について、1セット終了時：96.4 ± 1.9 %、2セット終了時：95.4 ± 1.9 %、3セット終了時：94.6 ± 2.5 %、4セット終了時：93.6 ± 2.9 %、5セット終了時：92.9 ± 3.0 %であった。非マスク着用時の測定値については、1セット終了時：97.8 ± 1.3 %、2セット終了時：97.1 ± 1.2 %、3セット終了時：97.1 ± 1.4 %、4セット終了時：96.7 ± 1.3 %、5セット終了時：96.4 ± 1.3 %であった。その他の指標の結果については、大会当日に発表する。

【参考文献】

- Barbosa, T. M. (2020) Wearing face mask during physical exercise. *Motricidade*, vol. 16n. 4 : pp. 1-3.
- Danny Epstein et al. (2021) Return to training in the COVID-19 era: The physiological effects of face masks during exercise. *Scand. J. Med. Sci. Sports*. 31:70-75.
- 川井良介, 神田智浩, 堀天, 長谷川大祐, 堀田典生 (2021) 剣道稽古中のマスク着用が学生剣道選手の経皮的動脈血酸素飽和度に与える影響. 日本武道学会第54回大会.
- Keely Shaw et al. (2020) Wearing of Cloth or Disposable Surgical Face Masks has no Effect on Vigorous Exercise Performance in Healthy Individuals. *Int. J. Environ. Res. Public Health* 2020, 17, pp1-9.
- 田平一行, 藤井宏匡, 相田利雄, 堀江淳 (2008) 呼吸器疾患患者における酸素摂取量に影響する因子. 第43回日本理学療法学会大会抄録集, 35 (2) : 783.
- 浦部隼希 (2021) 剣道授業におけるマスクの着用が運動強度に及ぼす影響—異なる運動強度の素振りに着目して—. 環太平洋大学研究紀要, 18 : 263-266.
- 全日本剣道連盟 (2020) <https://www.kendo.or.jp/information/20200624/>. (参照日 2021年2月1日).

大学剣道選手における打突動作反応時間と 下肢の伸張-短縮サイクル能力との関係

○周藤和樹¹⁾、中谷敏昭^{1,2)}

¹⁾ 天理大学大学院体育学研究科、²⁾ 天理大学体育学部

【背景および目的】

大学トップレベルの剣道選手では、打突動作時間に競技レベルの差は認められないものの、選択刺激における課題遂行時間は早いとの報告がなされている（椿ら，2016）。この報告では、一足一刀の間合いからの面、小手、突き動作の反応時間を明らかにしているが、実際の試合場面では引き技あるいは間合いに入ってから打突も多くみられる。剣道の有効打突は「気剣体の一致」が条件であり、相手より素早く竹刀の打突部を有効部位に打ち込むことが求められ、打ち込む際は左脚で床を蹴り、右脚で床を強く踏み込む。そのため、動作開始時の両脚で踏み込むための筋力や筋パワーは極めて重要であり、その能力の優劣が打突動作時間に大きく影響する（西谷ら，2005）。そこで本研究では、大学剣道選手を対象に、一足一刀、鏝迫り合いの間合い、遠間からの打突動作を行わせた際の単純反応および選択反応時間、全身反応時間と下肢の伸張-短縮サイクル（以下、SSC）能力との関係を検討することを目的とした。

【方法】

対象者は、T大学剣道部に所属する男子選手 24 名（平均値±標準偏差：年齢 19.3±0.6 歳、身長 171.1±4.7 cm、体重 66.7±8.4 kg）で、全選手の競技年数は 8～15 年の範囲であった。対象者には本研究の主旨と目的を説明し、参加することの同意を得ている。

打突動作における単純反応および選択反応時間は、灘本ら（2003）の方法を参考に、全身反応測定器Ⅱ型（竹井機器製）の刺激呈示部の信号をデジタルタイマー（竹井機器製）に取り込み、光刺激から赤外線センサーを竹刀が横切るまでの時間を計測した。単純反応時間の測定には赤色を用い、選択反応時間は青色の場合は打突、赤色の場合は打突をせずに構えの姿勢を維持するようにさせた。間合いは一足一刀、鏝迫り合い、遠間とし、打突部はいずれも面とした。全身反応時間はリアクション（竹井機器製）を用い、赤色の光が呈示後すぐにマットから離床する時間を 1000 分の 1 秒単位で計測した。すべての反応時間は、練習 2 回、試技 5 回の計 7 回を行わせ、最高値と最低値を除いた中 3 つの平均値とした。打突動作の測定では有効打突のみを記録した。

SSC 能力は、リバウンドジャンプ、カウンタームーブメントジャンプ、ドロップジャ



ンプとした。リバウンドジャンプは、その場での6回の連続リバウンドジャンプとした。カウンタームーブメントジャンプは、両足での前方への立ち幅跳びと左右片足による後方への立ち幅跳び、ドロップジャンプは、20 cmの台から片足で着地させ反動を用いた前方へのシングルレッグドロップジャンプを行わせた。いずれのジャンプ動作も両手を腰に当てた姿勢とした。各種反応時間とSSC能力との関係はピアソンの積率相関分析と競技年数を制御した偏相関係数分析を行った。有意水準は5%とした。

【結果および考察】

各間合いでの単純反応および選択反応時間、全身反応時間とSSC能力との関係を表1に示した。単純反応時間とSSC能力との関係は $r = |.047 \sim .449|$ で、一足一刀の間合いと左脚の後方への立ち幅跳びのみ有意な相関関係を示した。選択反応時間とSSC能力との関係は $r = |.001 \sim .388|$ で有意な関係はなかった。全身反応時間とSSC能力との関係は $r = |.172 \sim .383|$ で有意な関係はなかった。これらの関係性は競技年数を制御した偏相関係数の結果でも同様であった。中段の構えからの打突では、踏み込み脚(右)と蹴り脚(左)で床を強く蹴ることが求められるが、本研究の単純反応及び選択反応条件での打突動作時間とSSC能力に関係性はなかった。西谷ら(2005)は、有効打突の重要な要素に踏み込み脚(右)の大きな床反力が関係していると述べている。また、Inaba & Morioka (2020)は、踏み込み脚側のつま先筋力が大きいと指摘している。本研究の大学剣道選手においては、様々な間合いや動作での打突動作反応時間とSSC能力との関係性は乏しかったことから、先行研究の結果とは異なるものであった。この相違は、相手との駆け引きの中で求められる予測、竹刀を振るスピード、競技レベルなど、多くの他の要因が関係していた可能性も考えられる。本研究ではこれらの影響を明らかにすることはできなかったが、打突動作の素早い反応時間は優れた競技パフォーマンスを発揮する上でも重要な要素(椿ら, 2016)であり、下肢のSSC能力が反応時間に影響している可能性も考えられることから今後の検討課題としたい。

表1 各条件での打突動作時間と全身反応時間、伸張-短縮サイクル能力との相関関係

	リバウンドジャンプ		カウンタームーブメントジャンプ		ドロップジャンプ	
	RSI	SLJ	SSLBJ-Right	SSLBJ-Left	SLDJ-Right	SLDJ-Left
単純反応時間						
一足一刀の間合い面	-.115	-.285	-.015	-.449*	-.200	-.246
鏑迫り合いからの引き面	.214	.147	-.113	-.371	-.199	-.047
遠間からの打突面	-.057	.053	-.226	-.094	-.185	-.243
選択反応時間						
一足一刀の間合い面	-.387	-.062	-.006	-.288	-.256	-.284
鏑迫り合いからの引き面	.170	.388	.163	-.113	-.124	-.001
遠間からの打突面	-.345	-.181	-.355	.051	-.309	-.359
全身反応	-.337	-.172	-.380	-.383	-.375	-.339

RSI, reactive strength index; SLJ, standing long jump; SSLBJ, standing single-leg backward jump; SLDJ, single leg drop jump.

*P < 0.05

ナノフィール（空気清浄機）使用時の効果について —剣道における更衣室空間の事例から—

上宇都 鉄舟（国際武道大学）

【研究の動機及び目的】

新型コロナウイルス（COVID-19）が2019年末に発生し、今もなお感染は拡大している状態にある。また、感染拡大に伴い、スポーツ、武道にも練習、稽古、試合内容が変化している。剣道を例に挙げるならば、「主催大会実施にあたっての感染拡大予防ガイドライン」と「暫定的な試合・審判法」が新たに設けられ、それに基づき各種大会が実施されている。しかし、筆者が指導している大学剣道部の状況を見てみると、学生同士が特に密集する更衣室での感染対策も重要であると考え、学生に注意を促してきた。このような現場の状況を踏まえると、剣道で使用される更衣室の環境を整えることも今後進めていく必要があると考える。

本研究は、コロナ社と国際武道大学剣道部の共同で実験を行ったものであり、ナノフィール（空気清浄機）を更衣室に設置した場合と設置しなかった場合に選手のパフォーマンスにどのような効果もたらすのかについて明らかにしたものである。本実験は、新型コロナウイルス発生以前に行ったものであるが、剣道における感染対策を講じる上で、本実験データが有益な情報になりうると考える。

【方法】

1. ナノフィールの運転

ナノフィールの運転は、試験前日の夕方に給水し、運転を開始する。翌朝の朝練習時は運転したままとする。また、男子更衣室と女子更衣室にそれぞれナノフィールあり、なしでの試験を行った。

・男子更衣室

ナノフィールありでの期間：6月26日～29日

ナノフィールなしでの期間：7月3日～6日

・女子更衣室

ナノフィールありでの期間：7月3日～6日

ナノフィールありでの期間：6月26日～29日

2. 温湿度測定

温湿度は、試験期間中終日データロガー測を行い、試験評価は朝練習中の6:30～8:30のデータを抽出して対象データとした。

3. 更衣室内の落下菌測定

落下菌の測定は、朝練習時、練習前の更衣が終わり、練習終了までの間（7:00～8:00）

に落下菌検出シート（サニ太くん）を更衣室内の所定の場所に設置した。

4. 使用感アンケート

対象・剣道部所属の男子 20 名、女子 19 名

アンケート実施日は、ナノフィールあり、なし期間にそれぞれ 3 回のアンケートを実施した。

【結果及び考察】

男子のナノフィール使用感アンケート結果は、ナノフィールありの方がなしに比べて、空気の汚れ、今日の練習の達成感の項目の点数が有意に高かった。

女子のナノフィール使用感アンケート結果は、ナノフィールありの方がなしに比べて、空気のうるおい、空気のさわやかさ、空気の汚れ、全体的な部屋の臭い、部屋の汗臭さ、練習中の意欲、練習中の集中度の項目の点数が有意に高かった。

男子更衣室、女子更衣室の室内環境はともに、物理計測値である湿度、不快指数はナノフィールありの方が高いにもかかわらず、使用感アンケート結果はナノフィールありの方が、有意に点数が高い項目が多かった。特に女子更衣室では、その傾向は顕著で、空気のうるおい、空気のさわやかさ、空気の汚れ、全体的な部屋の臭い、部屋の汗臭さという、空気環境の体感項目の点数が有意に高かった。これは、温度と湿度に起因する不快感は数値上悪化するが、ナノフィールの消臭、空清効果があり、体感として感じられることを示唆している。

使用感アンケート結果はナノフィールありの方で、今日の練習の達成、感練習中の意欲、練習中の集中度というマインドの部分の点数も有意に高くなった。このことは、ナノフィールから発生するナノミストの効果によるものも一因であると推察できる。

その他の結果及び本データを踏まえた更衣室における感染対策案については、発表において示すこととする。

明治期の「武道」概念に関する一考察
— 武士道としての語義に着目して —

堀川 峻（筑波大学） 酒井利信（筑波大学） 大石純子（筑波大学）

I. 研究の背景及び目的

「武道」の語は現代において「武技の修練による心技一如の運動文化」とであると定義されており、日本で発祥し独自の発展を遂げた身体運動文化の総称として用いられている。「武道」の語が今日のような用法を確立していく変遷については、近年においても寒川恒夫や中嶋哲也らによって詳細な検討がなされてきており、近世期には武術・武芸と武士道、双方の意味合いを含んでいた「武道」が、明治期以降に身体運動文化としての意味合いを確立していったことが明らかにされている。さらに以上の先学においては、特に明治28年の大日本武徳会設立や明治45年の西久保弘道「武道講話」等に注目して、明治期後半以降における「武道」の語義を中心に考察が為されている。しかしこのような中で、近世期に用いられていた武士道としての語義が、近代以降にどのような変遷を遂げていったのかという部分については、これまでほとんど考察が為されておらず、未だ検討の余地があるといえる。この点について解き明かすことは、「武道」概念の変遷過程をさらに詳細に紐解くのみならず、近世期における武士道思想が近代以降へといかに継承されていったのかという部分を解き明かすことにもつながるといえる。そこで本研究では、明治期における「武道」概念の変遷について、特に武士道としての語義がいかに近世期から受け継がれ、その後変化していったのかに着目しつつ解き明かすことを目的とする。

II. 先行研究と問題の所在

「武道」概念の変遷について詳細な検討を行った代表的な研究としては、先にも触れた寒川恒夫『日本武道と東洋思想』がある。そこでは「武道」の語が、近世期に「武事・武術と武士道」の二義を含んで用いられていたものの、明治以降に「武士道」の意を表すことが「許されない新しい社会状況」となったとの指摘がなされている。さらに寒川は菅野覚明『武士道の逆襲』での指摘を引用しながら、明治30年代以降に武道や武士道の語が多く用いられるようになったことにも言及しており、明治45年に「武道講話」を行った西久保弘道を「今日の武道概念を導いた唱道者」として、明治27年に『武道教範』を著した隈元実道を、そのような「精神文化の、おそらく最初の根」として挙げている。さらに中嶋哲也『近代日本の武道論—〈武道のスポーツ化〉問題の誕生』では、先述した寒川の指摘を参照しつつ「明治27年(1894)年の日清戦争以前は武士道のみならず武道という語もまた公言が憚られる雰囲気があった」と言及しており、明治期後半以降における「武道」概念の成立過程について指摘を行っている。このように、これまでは主に明治期後半からの著述を取り上げ、今日のような「武道」概念が成立していったことが明らかにされてきた。しかしこれらの先学において、明治期前半、つまり日清戦争が始まる27年より

も前にみられる「武道」の用例については、武術の学校への導入を目指した坂谷素や教育行政を牽引した伊澤修二など限定的な言説に触れられているのみである。また近世以前にみられる武士道としての語義が、いかに明治期に受け継がれ、その後変化を遂げたのかという部分については、ほとんど検討がなされてきていない。そこで本研究では、日清戦争よりも前（明治26年以前）にみられる「武道」の用例について、それらの語義を網羅的に把握・検討することで、近世期にみられる武士道としての意味合いが、明治期にいかに受け継がれ、その後変化を遂げたのかを詳細に紐解くことを問題の所在とする。

III. 研究方法及び研究資料

本研究は、明治26年以前にみられる「武道」の語を網羅的に抽出し、それらがいかなる語義で用いられているのかを詳細に検討することで、近世期における武士道としての意味合いが明治期にいかに受け継がれ、また変化を遂げたのかを解き明かしていく。また文献資料としては、明治26年以前に著された文献の中で、「武道」の語が用いられている著述に網羅的に当たり考察を行っていくが、以下にはその中でも文献・著述のタイトルに「武道」の語がみられる主な文献資料を列記していく。

- ・森田良見『武道致知書私小鏡』（1870）
- ・清水国虎『武道剣法手引草』（1888）
- ・「女学雑誌（271）社説 武道の辨」（1891）
- ・重野安繹「東洋学芸雑誌 8(118) 忠義武道播磨石」（1891）
- ・日下部三之介「教育報知(277) 武道教育論」（1891）
- ・武骨居士『合気之術：武道秘訣』（1892）
- ・星野慎之輔「女学雑誌（359）（360）（361）論説 女子教育と武道」（1893） 他

IV. 結果及び考察

まず、武道や武士道の語を用いることがためらわれる風潮にあった明治26年以前においても、いくつかの文献において「武道」の語がみられ、さらに武士道としての語義で用いられている記述も数か所みられた。例えば、明治17年『絵本赤穂義士銘々伝』における「堀部父子武道評判の事」では、堀部彌兵衛・安兵衛親子が日頃から身なりを整え、掃除や整頓を怠らない様子が記されており、武士としてあるべき日常的な生活態度が「武道」の語で表されている。また明治19年『修身口授用書上』における「武道ヲ確守シテ。外見ヲ飾ラザル話」では、「元來小禄ナリト雖モ。武具馬具ノ類乏カラズ。家居衣服ナドハ。最モ質素ニシテ。唯武事ニノミ心ガケ厚シ」と、芝山という武士が家や衣服などは質素にして、武備を充実させていたことが語られており、この記述も武術・武芸の意味合いでなく、武士道の語義であると解せられる。筆者は前稿において、明治26年以前に武士道と題された文献・著述がごくわずかであることに触れており、さらに明治10年代においては管見の限りみられない。そのような中で「武道」が近世期の武士道を受け継ぐ意味合いで用いられていたことは、特筆すべき事実であるといえる。

その他の詳細な考察については紙面の都合上割愛する。

巖本善治の「武道の辨」に関する一考察

大石純子（筑波大学体育系）

【研究の背景と意義】 従来の武道と女性についての歴史研究では、武芸・武道に関わる女性の希少な史実解明に焦点が置かれてきた。これらの研究は、男性主体で展開してきた武道史において看過されてきた女性に関わる歴史的事象をあぶりだしてきた点において有意義であったが、武道思想の近代化の過程において「女性」という存在がいかなる影響を及ぼしてきたのかという視点からは検討されてこなかった。そこで、男性とは異なる身体性を有し、世相に応じて変化する女性像や女性観に左右されてきた「女性」という存在、そして、それに付随して展開された女性解放思想、女子教育論、女性に言及した一般論説などの諸言説が、近代武道思想の変容や発展にいかなる影響を及ぼしてきたのかという観点からの考察を進めつつある。

社会における男女平等や男女共同参画が提唱されて久しく、近年では女性の地位向上や社会的進出をも超越したジェンダーニュートラルな価値観が広まりつつある。ここにおいて「女性」に焦点化しながら研究することは、現代社会の潮流に反する営みかも知れないとの危惧はある。しかしあえて武道文化や武道史発展における「女性」の意義や役割を解明していこうとしているのは、この観点がこれまでの武道史研究においてあまりにも看過されてきたためである。男性を中核として把握されてきた武道史に「女性」の諸事象を加え武道史を総合的に再構築することで、現代社会に還元するにふさわしい武道史大系が整うのではなかろうか。この意味において、本研究は武道史の見方に新たな視角を与え、その再構築に寄与しうるものである。そのように再構築された武道史の社会への還元は、武道に携わる現代女性をはじめとする多くの人々が将来に向けて如何に武道の発展に関わりうるかを示唆する可能性を秘め、さらには人々の生きがいの創出をも導き得るのではなかろうか。

【先行研究と問題の所在】 筆者は、ここまでに於いて近代期剣道書における女性論の分析を行い、香川輝著の『剣道極意』（大正5年（1916））に顕著な女性論がみられること¹、さらに、これに先立つ香川の言説（明治42年（1909）刊行の雑誌「成功」に掲載された小論稿）においても香川が女性に言及していたことを確認した²。香川輝は「剣術知事」の異名があった他、無心流を創始するなど剣道に熱心な人物であり、佐賀県知事として在任中の明治34年（1901）～明治41年（1908）には、女子教育の発展（女子の実利教育としての裁縫の必要性の主張や佐賀高等女学校の開校）に関与しており、女子教育にも一定の理解を示し推進した。明治後期の剣道家でもあった香川がそのような動向をみせた背景には、明治20年

¹ 大石純子：近代剣道書にみられる女性論の分析，身体運動文化研究，25：33-61，2020。

² 大石純子：香川輝著『剣道極意』における女性と武士道の関連の生成とその背景，武道学研究，54(1)，早期公開中。

https://www.jstage.jst.go.jp/article/budo/advpub/0/advpub_2104/_article/-char/ja

頃からの明治女学校の教育における薙刀の導入、『女學雑誌』における巖本善治や星野慎之輔（天地）による武道と女性に関する論稿の掲載など、武道と女性を関連付けた世相があった。これらの点を踏まえ、日本武道学会第54回大会では、「女學雑誌」に掲載された武道と女性に関する記事の概要について整理して捉え、巖本善治によって執筆された記事について考察した。そして、彼の執筆した武道に言及した記事のうち、「武道の辨」（「女學雑誌」271号、272号掲載）が、巖本善治の武道論の最も充実したものであること、その内容において武道の教育的意義に触れていることについて言及した。しかし、「武道の辨」の内容解釈の詳細については考察が至らなかった。

「女學雑誌」に武道関連の記事が複数掲載されていること、「女學雑誌」の中核的編集人として活躍した巖本善治も武道に関連する記事を執筆していたことについては、既に中川裕美³、ルクミナイテ^{4, 5}らの研究によって言及されている。その中で、中川は女子体育思想の展開を明らかにする観点から「女學雑誌」の記事を分析し、その過程で、「女學雑誌」における武道関連記事の表出が明治20年頃からであると述べている。また、ルクミナイテは、女子教育における武道の導入に着目し、その中で巖本善治の武道論の一端及び星野慎之輔（天知）の武道論について分析し、それらの女子教育における位置づけについて考察している。しかし、中川やルクミナイテにおいても、巖本善治の「武道の辨」の内容解釈に焦点を当てて論じていない。

【研究の目的】 本研究は、巖本善治の著作である「武道の辨」の内容を解釈し、その骨子を把握することで、女学思想啓蒙家・巖本善治の武道論の一端を解明することを目的とする。

【研究方法】 本研究では、「女學雑誌」第271号（明治24年6月27日刊）及び第272号（明治24年7月4日刊）に掲載された「武道の辨」を底本とし、そこに記載された内容を解釈することで、巖本善治の武道論における論理展開の骨子を把握していく。

【考察】 「武道の辨」は、「(一)新喝采」「(二)武の藝、及び道」「(三)諸藝の精神」「(四)武道奥妙」「(五)文武不二」「(六)武育」の6項目が「女學雑誌」の271号から272号にわたって掲載された論稿である。具体的な内容解釈及びその考察については、当日の発表資料にゆずる。

※本研究は JSPS 科研費 JP21K11518 の助成を受けたものである。

³ 中川裕美：『女學雑誌』の記事に見る女子体育思想の変遷，出版研究，46：63-88，2015.

⁴ Lukuminaite, Simona: Physical Education in the Meiji Education for Women, グローバル日本研究クラスター報告書，1，101-120，2018.

⁵ Simona LU: Women's Education and Meiji Jogakkō and Martial Arts, Asian Studies, 6(22):173-188, 2018.

日欧対話による国際的「生涯武道論」の構築について

○酒井 利信(筑波大学) 阿部 哲史(国際武道大学) 二宮 恭子(筑波大学)
堀川 峻(筑波大学) 筒井 雄大(国際武道大学)

I. はじめに

武道は、生涯にわたる人間形成を標榜するものであり、まさに生涯学習としての教育的価値が認められつつ日本社会に位置づいている。至って精神面(心)への影響が期待されてのことであるが、ここには‘身体(訓練)を通して心を変える’という考え方があり、心と身体を一体不可分のものとして捉える心身関係論が潜在している。一方海外では、従来、こういった日本武道の考え方は、キリスト教社会における異文化による人間形成の拒否や、デカルト以来の心身二元論社会における心身関係論の否定といった阻害要因により、従来のままの形では容易に受け入れられてこなかった。しかし近年、東欧において武道の教育力を許容し始めている事例が確認されている。本研究はこれを‘好機’と捉え、日本と東欧の研究者が叡智を結集しつつ、国際的な「生涯武道」の問題にアプローチするものである。

II. 本研究の目的

本研究は、‘武道教育による生涯学習—「生涯武道」は海外で通用するか?’ということテーマとして掲げ、これを実現させるための国際的「生涯武道論」を構築するモデルを提示し、既に調査済みの事例をこれに当てはめて、この構想の有効性について検証することを目的とする。

III. 国際的「生涯武道論」構築モデル

本モデルの基本的な研究デザインは、既存のロジックを書き換えることである(図1参照)。先ずは日本の歴史に照らしてこのロジックを再検討し^A、更に東欧における事例を分析して^B、両者を照合せながら国際的に汎用性の高い生涯武道としてのロジックに書き換える。

具体的な研究方法としては、文字テキストを解釈する文献学的手法に質的データ分析方法を援用しつつ分析・考察を行う。

IV. 東欧における調査事例の適用

本論においては、上述提示した国際的「生涯武道論」の構築モデルについて、「A. 日本における既存のロジックの再検討」に関しては従来文献学的手法により継続的に行ってきた手法であるためひとまず措いておき、「B. 東欧における事例の分析」について、既に調査済みの事例を試論的に当てはめてその有効性を検証する。

1. 研究対象

本論において取り扱う事例の具体的な研究対象者は、以下に示すユーゴスラビア紛争時における元兵士 A である。

- ・1969年生れ カルロヴァツ(クロアチア)在住
- ・クロアチア特殊警察部隊(Special police force)のスナイパーとして従軍

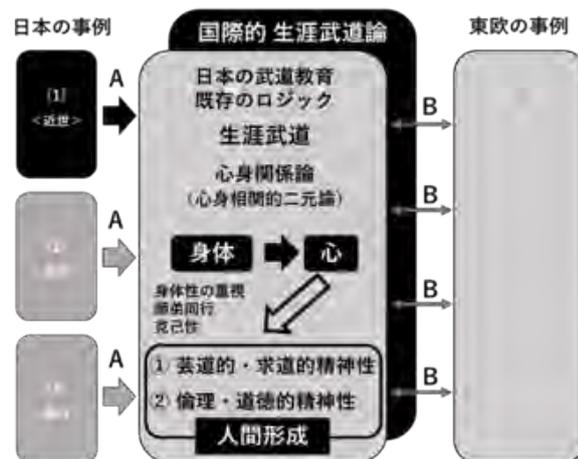


図 1

・戦前戦後を通して、空手、剣道、居合道(四段)を実践

なお、本研究で開示する情報は、本人に直接確認をして承諾を得た事項のみである。

2. 東欧における事例の分析－研究方法の適用

本研究においては、ハンガリーのラジオ放送番組のために行われたインタビューの録音音声データを入手し、本人が自発的に記述した回顧録を受領、更に内容確認のための Zoom インタビューを2回、メールインタビューを3回行った。音声・画像データについては文字データ化し逐語録を作成した。本論においては、上記により入手し整理した①回顧録、②ラジオ放送用対談記録、③インタビュー記録の文字テキストを分析対象とし、本モデルにおける研究方法を適用した。

3. 結果および考察

ユーゴスラビア紛争時の元兵士であるAについて、劣悪な家庭環境が少なからず影響して始めた武道が紛争への参戦の契機となり、スナイパーとして闘った戦時中の狙撃による殺人や生死の境を経験したことに加え、戦後の一般社会からの疎外感等から、睡眠障害や悪夢ひいては自殺未遂にいたる精神障害を引き起こし、これを武道により克服した過程が明らかとなった。

戦後の精神障害の克服、つまり武道による精神の癒しに焦点を当て、これを日本武道学のロジックに照らして考察すると、Aの稽古は至って鍛練主義的であり「身体性の重視」、更に身体を通して心を変える「身体→心」のベクトルが明らかであり、「子弟同行」や「克己性」も確認された。更に「芸道的・求道的精神性」「倫理・道徳的精神性」2つの精神的影響が確認された。以上より、武道学における武道教育のロジックが海外において有効に機能していることが明らかとなった。

更に本論におけるテーマである、「武道教育による生涯学習－「生涯武道」は海外で通用するか？」という問題であるが、本事例においては、Aは14歳から52歳の2021年現在まで40年近く武道を継続してきており、それによる自らの変化・成長について自覚している。つまり、東欧における本事例において「生涯武道」は有効に機能していると言える。

具体的な変化・成長としては「倫理・道徳的精神性」が「芸道的・求道的精神性」に次いで顕現したこと、更に「芸道的・求道的精神性」の内容が当初実戦性(殺傷性)に重きをおいていたものから自己の内面に向けられ、修行そのものに意味を見出すようになり、これらを日常の生活に適用するようになったことがあげられる。こういった順序、思想的変遷は我われ日本人が自国の歴史の中で体験してきたことであり、現在の東欧はこれを追体験しているとも考えられる。現在の東欧を理解することで、我われが見えなくなっている武道の精神史が明らかになるのではないかと考えられ、東欧における事例分析との照合は有効かつ必要である。

しかし一方、東欧では日本における生涯武道の感覚とは異なる面も確認できる。日本では一つの武道を生涯永く続ける傾向が強いが、東欧ではそういった意識は希薄である。日本の生涯武道を自文化に適した形で改変しているとも考えられ、国際的「生涯武道論」の再構築は必要である。

また、日本の生涯武道において指摘されている内容での段階的技術観は今のところ認められずこれが文化的な相違によるものなのか、東欧がまだその段階に至っていないのかは不明であり、引き続き継続的な調査研究が必要である。

以上より、本論で提示した研究モデルで一定の結果が得られること、本構想における手法が有効かつ必要であること、国際的視点から本研究を継続的に実施することの必要性が示唆された。

尚、本論において取り扱った東欧における事例分析は、筑波大学体育系研究倫理審査において承認されたものである。(課題番号第体020-154号)

災害と祭に関する研究—魂・心性・身体性の視点から—

前林清和（神戸学院大学）

はじめに

わが国は、災害多発国であり、東日本大震災では約2万人もの人々が犠牲になった。

多くの被災地では、人々は祭の復興を願う。なぜ、人々は生活再建もままならないのに、一刻も早く神社を修理し、祭を再開したいのであろうか。災害という生死の際のなかの神と人に焦点をあてて、その心性や魂、身体性について考えてみる。

1. 被災地

東日本大震災後、被災地ではまち全体が「生」ではなく「生死」の世界が広がっていた。そのなかで、人々の魂が揺れ、亡くなった人の魂が揺れ、地霊の魂も揺れている。特に、地震は人間が抛って立つ地面が揺れる。「霊」「魂」といった怪しげな概念は、一般的に否定的に見られるが、大規模災害のなかに身を置くと多くの人々が魂や霊を実感し、そのこと抜きでは生きる、死ぬということを納得できないのだ。

2. 日本の心性—自然と神—

日本は、温帯モンスーン気候帯にあり、豊かで変化に富んだ自然が展開している。その自然は、私たちに恵みと脅威を与えてきた。その自然に対して、日本人は神を感じてきた。そして、日本人は自然と神、人間を西洋の神⇒人間⇒自然という世界観ではなく、自然の中に神を感じ、自然の一部として人間を捉えて生きてきたのである。神道は多神教であり、「八百万の神」というように世界には無数に神々がいると考えられている。神々には、自然崇拜による自然神や日本神話の神々、人格神などがあるが、日本人は、神は人間以上の力をもつが、神も人間も平等な価値をもつ靈魂と捉えてきた。これが日本人の心性である。

一方、荒ぶる神としての山の神、川の神などは、時として人間に災いを及ぼす。しかし、荒ぶる神は絶対的な悪ではなく、荒魂（あらたま）とともに和魂（にぎたま）も持ち合わせている。人間や生物だけでなく、神も自然も二面性を持っているのだ。

3. 祭と災害

祭は、神霊をその場に招き、神霊を饗応し、神霊を慰め、人間への加護を願うものである。わが国の祭りは稲作儀礼を中心とし、その年の農耕を始めるに先立って行われる春の祈年祭、収穫を終えて田の神を再び山に送る秋の感謝祭が主となる。そして、夏は悪疫退散を祈願する御霊信仰的な祭祀である。夏祭りは主に荒ぶる神を鎮める祭であり、死者を供養する祭りである。神輿渡御や神楽や踊りによって、靈魂を鎮めるのである。

4. 鎮魂と身体性

祭の際に行われる儀式、特に鎮魂に関する儀式は身体の動きを伴う。

本来の鎮魂は、古代の日本の宮廷儀礼としておこなわれた儀式であり、現在も宮中で新嘗祭の前日の夕刻から天皇の鎮魂のために行われている。鎮魂の読み方は、「たましずめ」と「たまふり」の2とおりがある。つまり、この儀式に2つの意味がある。「たましずめ」とは「遊離した、また遊離しようとする魂を鎮め、肉体につなぎ止める祭儀」であり、「たまふり」は「魂に活力を与え再生させる呪術。またその呪術を行うこと」である。そして、鎮魂祭は民間でも行われ、各地の神社において、病気になったり死に

そうになったりした際に「生の鎮魂」儀礼として行われてきた。一方、神道では、「死の鎮魂」の儀礼も古代から行われてきた。それがモガリである。しばらくはタマフリを行い、再生を試みるが、死が確定するとタマシズメの儀礼が行われ、死者の魂がさまよい災いを行わないようにして埋葬したのである。¹⁾

また、鎮魂のために神楽や踊りで行われる動きに「反閔」がある。反閔とは、大地を踏みしめて千鳥足に歩くという特殊な足の踏み方である。これは、巫女や踊り手が、邪気を閉じ込めて安泰を祈願するために行う足使いである。この動きは、大地を踏むといっても、決して対立しているのではなく、親和性の高い動きである。地霊や死者の魂とつながり、それを鎮め抑え込むための儀礼である。折口信夫は、常世から稀に来訪し村人に祝福を与える神々を「まれびと」と呼び、「まれびとは、祝言を以ってほかひをすると共に、土地の精霊に誓言を迫った。更に家屋によって生ずる禍ひを防ぐ為に、稜威に満ちた力足を踏んだ。其れによって地霊を抑圧しようとしたのだ。」とし、「まれびと」の力強い歩みを反閔と捉え、「自ら土地の精霊を惴伏させるのであった」と述べている。²⁾ この時、巫女や踊り手は神憑り状態になり、その身体は神が宿る入れ物で踏みしめる足は身体動作であると共に異界にも影響を及ぼす行為でもあるのだ。

5. シシ踊りにみる反閔

シシ踊りは、全国各地で見られる伝統舞踊である。特に、岩手県や宮城県など東北地方に多い。東日本大震災で大きな被害を出した南三陸町戸倉には、行山流水戸辺鹿子躍が伝わっている。これは3m近くの高さのササラ、伊達家より拝領した九曜紋や輪違紋が染め抜かれた衣装、神々を描いた艶やかな「流」、八ツ又に枝を広げた鹿の角を纏い反閔を繰り返しながら踊る鎮魂の舞である。津波によって、全ての道具や衣装が流されたが、震災直後から地域の人々の努力と情熱によって、復活し、地元だけでなく東北各地の被災地において、鎮魂のために獅子踊りを行っている。まさに、被災地において、なくてはならない祭の儀礼なのである。

おわりに

被災地は、生と死が共にある地域・時空間である。荒ぶる神や死者の霊、浮遊しそうな被災者の魂などが混沌とした時空間である。この空間を鎮め、奮い立たせ、復興させていく装置が祭なのである。祭において、鎮魂を行う巫女や踊り手は神憑りとなって神人合一の状態、荒ぶる神（地霊）を押し鎮め、死者の魂を弔い、被災者の魂を身体内に鎮め、奮い立たせるという重層的な魂の儀礼によって、被災地と被災者の人々を活性化していくのである。だからこそ、被災地では災害のあと、何よりも祭の復活が望まれる。

文献

- 1) 川村邦光、『弔いの文化史』、中央公論新社、2015年
- 2) 折口信夫、『折口信夫全集第一巻』、中央公論社、1972年、38頁

コロナ禍における東京オリンピック期間中の行動に関する一考察

上谷聡子 (神戸学院大学)

前林清和 (神戸学院大学)

1. 背景と目的

1年の延期を経て、2020東京オリンピックが2021年7月23日から8月8日まで開催された。大会期間中も新型コロナウイルス感染者数が増加し続けたことに伴い、連日メディアで報道されていたのが「東京オリンピックが国民の行動に影響している」といった内容である。実際に、東京五輪の会場周辺では見物客等で人出が増加していたようである(朝日新聞,2021)。しかしながら、緊急事態宣言が発出されていた11都道府県でも全体的な人出増につながっていたかどうかについては疑問が残る。そこで本研究では、東京オリンピック期間中に緊急事態宣言が発出されていた都道府県民へのアンケート調査から、当時の行動について明らかにすることを目的とした。

2. 調査対象者と調査の手続き

インターネット調査会社のモニターの中で、緊急事態宣言が発出されていた11都道府県(北海道,埼玉県,千葉県,東京都,神奈川県,石川県,京都府,大阪府,兵庫県,福岡県,沖縄県)に在住する20歳以上80歳以下の男女1500名に対し、2021年8月13日にアンケート調査を実施した。平均年齢は、47.6±13.8歳である。回答者の年代は、図1のとおりであった。

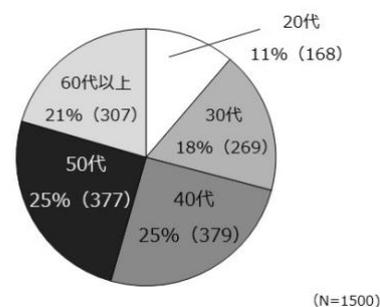


図1 対象者の年代

3. 調査の結果と考察

①2021年4月以降の自粛状況

2021年4月以降の自粛状況を聞いたところ、自粛を「非常にした」「ある程度した」と合わせて87%となり、約9割が自粛を行っていた。一方、自粛を「あまりしなかった」と「まったくしなかった」とは13%となり、約1割強が自粛をしていなかった。対象者の多くが、2021年4月以降も自粛を意識した生活を行ってきたことが伺える。

加えて、自粛理由について聞いたところ(複数回答可)、もっとも多かったのが「自分が感染したくないから」で87%、次いで「家族に感染させたらいけないから」が68%、「他人に感染させたらいけないから」が51%であった。これら上位3位の理由から、自分や周囲の人への感染を防ぐために自粛を行っていたことが明らかになった。

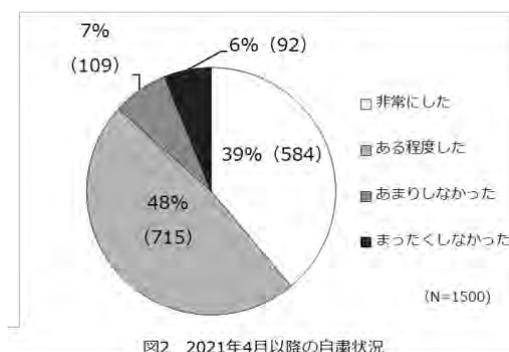


図2 2021年4月以降の自粛状況

②東京オリンピック期間における行動

東京オリンピック開催期間(2021年7月23日から8月8日)の外出・外食状況について、東京オリンピックの影響の有無との関係をまとめたのが表1である。出かけた人数や目的によって、東京オリンピックの影響、もしくは、東京オリンピックの影響以外の理由で外出・外食した人数を示した。なお、何らかの目的で外出した項目で、値が多かった上位3つに影を付けている。

表1 東京オリンピック開催期間（7/23～8/8）における行動状況

	東京オリンピックの影響（気の緩み等）		東京オリンピック以外の理由	
	行っていない	行った	行っていない	行った
1人で外食	80.1% (1202)	19.9% (298)	80.1% (1202)	19.9% (298)
1人飲み	95.8% (1437)	4.2% (63)	94.8% (1422)	5.2% (78)
1人で外出（買い物や遊び）	54.1% (811)	45.9% (689)	57.9% (869)	42.1% (631)
家族や友人（4人以内）などと外食	71.7% (1076)	28.3% (424)	75.4% (1131)	24.6% (369)
家族や友人（4人以内）などと飲み	91.9% (1379)	8.5% (121)	92.3% (1385)	7.7% (115)
家族や友人（4人以内）などと外出（買い物や遊び）	70.0% (1047)	30.0% (453)	75.1% (1127)	24.9% (373)
5人以上のグループで外食	95.1% (1426)	4.9% (74)	95.2% (1429)	4.8% (71)
5人以上のグループで飲み	96.4% (1446)	3.6% (54)	96.2% (1443)	3.8% (57)
5人以上のグループで外出（買い物や遊び）	96.0% (1440)	4.0% (60)	96.1% (1442)	3.9% (58)

大会期間中に「1人で外出（買い物や遊び）」を1回以上行った割合は、東京オリンピックの影響が45.9%（689人）、東京オリンピック以外の理由で42.1%（631人）ともっとも多かった。しかし、厚生労働省が掲げる感染リスクが高まる場面には該当していないと考えられるため（厚生労働省,2021）、1人で外出した人数の多さが新型コロナウイルスの感染拡大に直結したとは考え難い。さらに、感染リスクが高いとされているアルコールを伴う飲食は、行動の人数や東京五輪の影響有無に関わらず90%以上の人が「行っていない」と回答している。したがって、リスクを伴う行動についても東京五輪が影響していない状況が示唆された。さらに、それ以外の項目でも7割以上の方が「行っていない」と回答している。また、東京オリンピックの影響による外出・外食と東京オリンピック以外の理由による外出・外食の差も、最大で5ポイント（70人）程度であった。このように、東京オリンピックが人々の行動に大きな影響を及ぼしていないことが伺える。

4. おわりに

メディアでは「東京五輪が人々の行動に影響し、感染拡大へとつながった」という報道が多くなされていたが、緊急事態宣言が出されていた都道府県民へ行動に関するアンケート調査を行ったところ、報道から受けるイメージよりも自粛している状況が見られた。2021年4月以降の自粛状況の値とも大きくかけ離れていなかったため、東京オリンピックが人々の行動に大きな影響を与えたのではないと考えられる。本研究によって、メディアで報道された内容と異なる傾向があったことを示唆することができた。

参考文献

朝日新聞朝刊、2021年7月23日、五輪4連休、人の波 海外から人「都内を避けたい」/「大会やるのに外出自粛とは」
厚生労働省「新型コロナウイルス感染症の”いま”に関する11の知識（2021年9月版）

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708_00001.html 2021年9月10日

小学生軟式野球競技人口の動態

南方隆太(筑波大学)

1. 問題の所在と研究の目的

1871年に米国人教師によって日本に伝えられた野球は、学生野球を発端に人気を博し、メディアを通して全国に広まった。日本の国民的スポーツとして醸成した野球は、1990年代から競技人口が徐々に減少し始め、近年、その減少が大きくなり、野球競技の衰退が危惧されている。しかし、これまで野球競技人口の動態は研究されてこなかった。そこで本研究では、野球競技人口の動態と競技人口拡大のための課題を明らかにしたいと考えた。

野球人口の変化を見ると、小学生及び中学生の野球人口は減少が大きく、特に小学生野球人口の減少は中長期的な競技人口の減少につながる危険性が高い。そこで本研究では、小学生野球競技の中心である軟式野球の競技人口の動態を明らかにし、競技人口拡大に向けた課題を明らかにしたいと考えた。以上のことから本研究では、小学生軟式野球人口の動態と競技人口拡大のための課題を明らかにすることを研究の目的とした。

2. 先行研究の検討

これまで、野球競技の普及振興施策に関する研究はあるが、野球人口の動態を分析し、政策課題の分析を行った研究は管見の限り見当たらない。しかし、他競技において競技人口の動態に関する研究は多く行われてきた。それらの先行研究を大別すると、競技人口を地理学的な視点から分析した研究、競技人口と当該年代の人口を比較分析した研究、経済的指標との連関を分析した研究、競技人口の動態の要因を分析した研究がある。これらの先行研究を検討すると、第一に、競技人口の動態に関する研究では競技統括団体の選手登録者数を競技人口と捉えて分析を行っていること、第二に、競技人口の動態を分析しているが、競技人口拡大のための制作分析まではほとんど行われていないことが指摘できる。

3. 研究の対象と方法

本研究では、野球競技の中でも特に競技人口の減少が指摘されている小学生軟式野球(以下、学童野球とする)を研究の対象とし、学童野球を統括する全日本軟式野球連盟の選手登録者数を「小学生軟式野球競技人口」と定義し研究の対象とした。なお、統計資料の関係から研究の対象期間は2006年から2020年までとし、選手登録者数は2006年から2016年までは1チーム20人の推計値で、2017年から2020年は選手の実数となっている。

本研究の方法として、先行研究を参考に以下の3つの手法から分析を行った。第一に、小学生軟式野球競技人口を47都道府県別に集計し、その地域差を分析した。第二に、小学校生徒数に占める小学生軟式野球競技人口の割合(競技人口率)を分析し、小学校生徒数との相対的な競技人口の変化を分析した。なお、小学校生徒数は文部統計要覧及び文部科学統計要覧を参考資料とした。第三に、競技人口の変化とチーム数の変化の連関を分析した。なお、競技人口の実数が計測されたのは2017年以降であるため、2017年から2020年

までの4年間を研究の対象期間とした。

4. 結果と考察

小学生軟式野球競技人口を都道府県別にみると、2020年に最も競技人口が多かったのは東京都(1万7,582人)で、神奈川県(1万6,016人)、埼玉県(1万1,781人)と続いた。一方で、最も競技人口が少なかったのは愛媛県(804人)で、高知県(883人)、長崎県(970人)、福島県(1,097人)と続いた。次に、小学生軟式野球競技人口の変化率をみると、競技人口が最も減少したのは京都府(-146%)で、栃木県(-145%)、青森県(-135%)、岩手県(-135%)と続いた。一方で、最も減少が小さかったのは大阪府(-12%)で、神奈川県(-15%)、千葉県(-19%)、長崎県(-20%)、埼玉県(-30%)、福岡県(-30%)が続いた。

小学生軟式野球競技人口の小学校教育者数との相対的な変化をみると、2006年から2010年までは競技人口が増加していた。その後2013年から2016年にかけて小さな減少が見られ、2017年には大きな減少した。都道府県別の競技人口率では、2006年に最も割合が高かったのは和歌山県(11.84%)で、鳥取県(9.33%)、岐阜県(8.80%)、秋田県(8.24%)が続いた。2020年に最も割合が高かったのは、和歌山県(7.87%)で、秋田県(6.56%)、鳥取県(5.41%)が続いた。当該期間に競技人口率が増加したのは、福島県、大阪府、長崎県で、競技人口率の減少が大きかったのは、岐阜県、栃木県、和歌山県、鳥取県であった。

競技人口とチーム数の変化を分析すると、1チーム20人の概数換算から選手の実数換算に変更された2017年に、全国の1チームあたりの平均人数は17.29人になり、2.71人減少した。都道府県別に変化をみると、都市部では1チームあたりの人数が増加している傾向にある。一方で、1チームあたりの平均人数が大きく減少しているのは、四国地方、や九州地方、中国地方、東北地方であった。また、山梨県や京都府、和歌山県、大分県など、都市部やそれに隣接した府県でも大きな減少が発生している。

以上の結果を考察すると、次のことが指摘できる。第一に、小学生軟式野球競技人口は、2006年から2011年まで減少しておらず、2011年以降に初めは都市部で大きく減少し、2017年以降は、地方部での減少が顕著であったことである。しかし、2012年までは、小学生軟式野球競技人口は小学生の人口と比較すると、相対的には減少しておらず、競技人口が減少したとは言えない。第三に、都道府県ごとに競技人口の動態をみると、都市部よりも地方部で減少が大きいことである。第四に、競技人口が大きく減少したが、野球競技人口率が大きく減少しなかった京都府、青森県、岩手県、山梨県、高知県は、少子化の影響の影響が競技人口減少の主な原因であると推測される。第五に、競技人口も野球競技人口率も共に大きく減少した岐阜県、栃木県、和歌山県、鳥取県は野球をする子どもの数が減少していることが指摘できるため、少子化以外に減少の原因があることが推測される。一方で、野球競技人口率が増加した福島県、大阪府、長崎県は相対的に野球人口が増加していること、競技人口及び野球競技人口率のどちらも減少が小さかった千葉県、神奈川県は競技人口が横ばいであることが指摘できる。



<http://www.yatoro.co.jp/>

ヤトロ電子



柔軟で強力な仕入力で
研究開発をサポートいたします



YATORO
YATORO ELECTRONICS CO.,LTD.

ヤトロ電子株式会社

企業・教育・研究機関などの研究において必要な商品幅広く取り扱っています。

- コンピュータ及び関連商品の販売
 - サーバー
 - ネットワークシステム
 - 各種計測器
 - 電子部品
 - オフィス家具
 - 事務用品
 - 各種工事
- 記載以外の取り扱いしておりますので、お気軽にお問合わせください。

本社

〒300-3257

茨城県つくば市筑穂1-11-8

TEL 029-864-4484 FAX 029-864-4485

東京営業所

〒120-0034

東京都足立区千住1-11-2 北千住Vビルディング8F

TEL 03-3879-3355 FAX 03-3879-3356

東北営業所

〒984-0075

宮城県仙台市若林区清水小路6-1 東日本不動産仙台ファーストビル4階

TEL 022-796-3255 FAX 022-796-3256

直心影流の

軽米克尊

幕末から明治にかけて、武士階級として、いかに上つたがる剣道の祖のひとりとして名を馳せる直心影流。剣聖・男谷下餘守相友、島田虎之助、藤澤村ら多数の名人を輩出した名門流派ながらも、その全容は明らかにされていない。この謎に満ちた流派研究を果敢とした決意を以て、



近代日本の

武道論

（武道のスポーツ化）問題の誕生

著者：中嶋哲也 発行：2009年

中嶋哲也

「術」から「道」という考えが誕生した明治期、「スポーツ化」という議論が登場した大正期、さらには「古武道の「発見」」と「現代空手道を検証し、実在する「武道」と「スポーツ」の関係を示す」に注力する。武道論を一断する大著。

21世紀の柔道論

著者：藤堂良明・村田直樹

発行：2009年 2009年10月

世界二百以上の国と地域で盛んに行われている柔道に関する歴史と未来を考察。「文化史」「形の意義」「武術としての柔道」「競技としての柔道」「世界の柔道の動向」など、21世紀に必要となる知識をふまけておこなった新しい柔道論。

国書刊行会

〒174-0396 東京都板橋区志村1-13-15 TEL:03-6970-7421 FAX:03-6970-7427 HP: <http://www.kokushinkan.co.jp>
 *書店、ネット書店での購入、郵社への注文の場合、400円以上、送料がのこる場合があります。公刊品です。*価格日経出版

KAZUTAKA

一貴

日本製

ISHIZUE

礎

MADE BY KAZUTAKA

オリジナル
日本製甲手製造販売
オリジナル
剣道具一式販売
剣道具修理



〒630-8301

奈良市高畑町 614-1

梶原弘貴

携帯 080-4437-4526

FAX 0742-24-0115

<http://www.kazutakanara.com>

「最高の一本をお手伝い」

村木武道具

静岡県浜松市中区住吉 4 丁目 7 - 3 ネットショップ

電話 053-474-0239

FAX 053-474-8477

mail info@ken-jin.jp





教育用・医療用機材の
コンサルタント

東海教育産業株式会社
代表取締役 片瀬 敏行

本社 神奈川県伊勢原市下粕屋164 TEL.0463-92-1881(代)

千葉営業所 千葉県勝浦市新官1434-1 TEL.0470-70-2099(代)

<https://www.tokai-eic.co.jp/>

(株)東京正武堂

株式会社 東京正武堂 特約代理店

北斗松翠型墨名札 有名選手多数御愛用
剣道具のクリーニングも承ります



北斗武道具

TEL・FAX.0745-75-6128

〒636-0123 奈良県生駒郡斑鳩町興留2-5-1

<http://www.hokuto-budougu.jp/>



剣道・柔道・武道用品全般

加藤武道具店

〒899-5106

鹿児島県霧島市隼人町内山田1丁目8-3

TEL 0995-73-4637

FAX 0995-73-4638



国際武道大学

INTERNATIONAL BUDO UNIVERSITY

《体育学部》 ◆武道学科(9コース) ◆体育学科(6コース)

所在地:千葉県勝浦市新官841番地 入試問い合わせ:0120-654-210 n-center@budo-u.ac.jp